

免許法認定通信教育講座－聴覚障害教育領域－

聴覚障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目

聴覚障害児の言語発達

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所



これから「聴覚障害児の言語発達」の講義を始めます。

本講義のポイント

- 聴覚に障害のない子供（聴児）がどのように言葉を獲得し、発達させていくのか、その過程について知る。
- 聴児の言語発達の過程を踏まえた上で、乳幼児期に難聴がある場合、なぜ言葉を獲得することが難しいのか、聴覚障害児の言語発達の特徴や発達上の課題について理解する。

本講義のポイントです。

皆さんは、自分がどのようにして言葉が話せるようになったのかを、説明することはできますか。生まれてからの言語発達の過程について意識したことがない方が多いのではないのでしょうか。

聴覚障害がある場合、音声言語の発達は大きな課題となり、聴覚障害教育では様々な指導の工夫を積み重ねてきています。乳幼児期から早期に支援や教育を受けた場合には、聴覚に障害のない子供、以下聴児といいますが、聴児とほぼ同様の発達の順序をたどることが報告されています。そのため、聴覚障害児に対する言語指導においては、聴児の言語発達過程を踏まえ、その子供の現在の段階を把握し、次の段階に進むための活動を組むことが有効となります。

そこで、本講義では聴児がどのように言葉を獲得し、発達させていくのか、その過程について説明します。それを踏まえた上で、乳幼児期に難聴がある場合、なぜ言葉を獲得することが難しいのか、聴覚障害児の言語発達の特徴や発達上の課題について理解することを目標とします。

これ以降の講義において、聴覚障害児に対してどのような指導上の配慮が必要となるかを考えるための基礎的な内容を扱っていきます。

本講義の内容

I. 言語発達の基礎

II. 聴児の言語発達

1. コミュニケーションから言葉へ

2. 学習の手段としての言葉へ

III. 聴覚障害児の言語発達の特徴

IV. まとめ

本講義では四つに分けてお話しします。

はじめに、言語発達に関わる基礎的事項をお話します。

次に、乳幼児期にコミュニケーションから言葉へと獲得がどのように進むのかを説明します。続いて、コミュニケーションの中で獲得された言葉が、学習の手段としての言語へと習得されていく過程を説明します。その上で、聴覚障害児の言語発達の特徴について説明します。

最後に、本講義のまとめを行います。

I . 言語発達の基礎

4



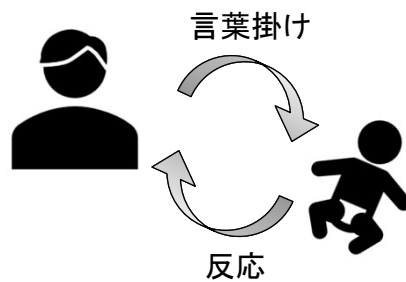
まず、言語発達に関わる基礎的事項についてお話しします。

言語発達

生まれてから一定の期間、特定の言語に触れることによって、その言語の知識が形成され、その言語を使えるようになっていく。

➡母語(第一言語)

特定の言語
(例: 日本語、英語、手話)



【参考】藤永保(監)(2013)最新心理学辞典. 平凡社. (p.156「言語教育」)

5



子供は、生まれてから一定の期間、特定の言語、例えば日本語、英語、手話等に触れることによって、その言語の知識が形成され、その言語を使えるようになっていきます。これを母語あるいは第一言語と呼びます。

聴覚障害があるからといって、誰でも手話が母語になるわけではありません。手話が母語になるためには、手話でのコミュニケーション環境があることが必要となります。

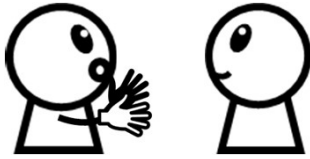
単に音声を聞いたり、手話を見たりするだけでなく、子供の様子に応じた大人の言葉掛け等、実際のコミュニケーションの中で触れることが重要です。

本講義では、特に大人との関わりに焦点をあて、子供の言語発達について考えていきます。

言語とは？

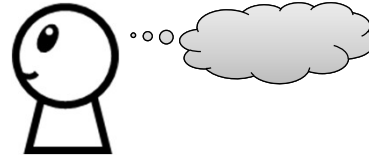
言語の機能

コミュニケーション手段



自分の気持ちを相手に伝える

思考の手段



頭の中で思考を深める
自らの意志と行動を決定する

【参考】藤永保(監)(2013)最新心理学辞典. 平凡社. (p.155「言語の機能」)

6



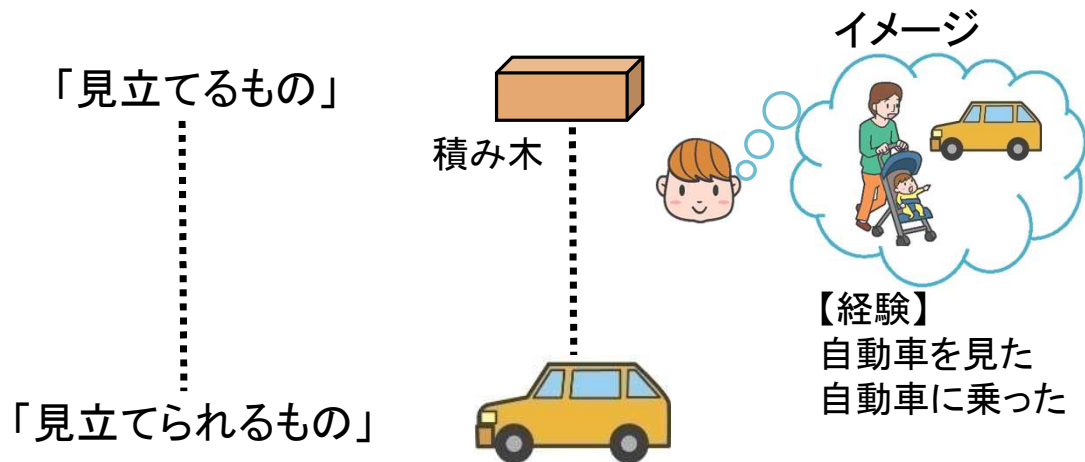
まず、「言語」とはどのようなものか、考えてみましょう。

私たちは、「言語」をどのように用いているでしょうか。

相手に今日あった出来事を伝えたい時、自分の考えや思い等を伝えたい時、言語をコミュニケーションの手段として用いることが多いのではないのでしょうか。ただし、それだけではありません。自分の気持ちや考えを整理するために、頭の中で考えたり、独り言を言ったり、書きだしてみたりすることはありませんか。言語は、思考の手段でもあります。幼児期には「おもちゃ買ってほしい。でも、我慢する。」等と、自分でもおさまりのつかない感情を、自分の発する言葉で押さえることが、徐々にできるようになっていきます。

このように、言語は、自分の気持ちを相手に伝えること、頭の中で思考を深めること、そして、自らの意志と行動を決定することが可能になっていくことと密接な関連があります。

シンボルとしての言語①



見立て(ふり遊び)によって、豊かなイメージが育っていく

【参考】長崎勤・小野里美帆(1996).コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社.
(p.136「ごっこあそびをする①物を機能的に使ってあそぶ」)

7



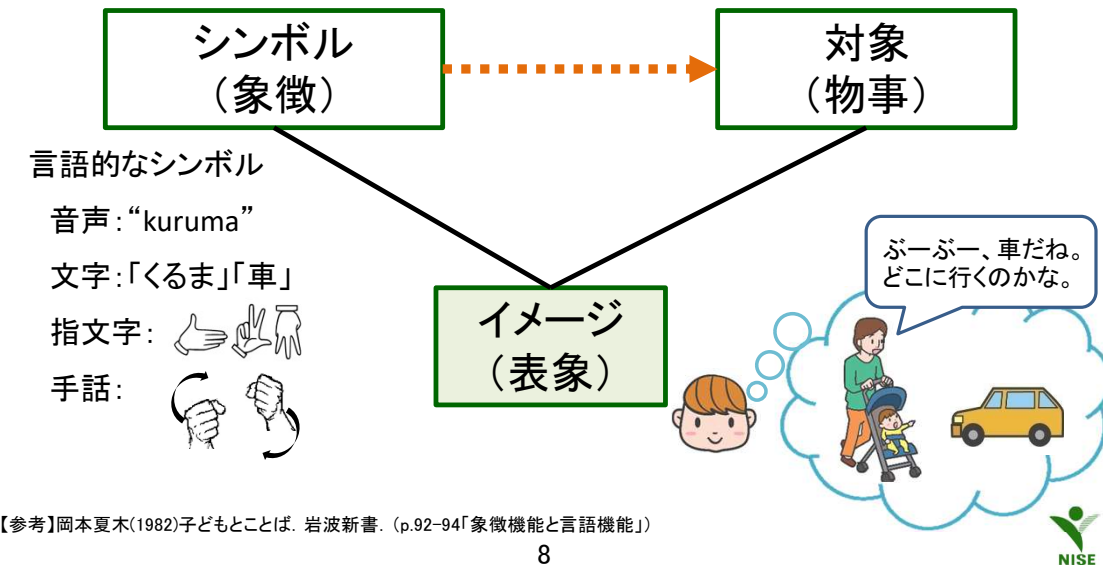
コミュニケーションの手段や思考の手段である「言語」は、物事や事象を表すことで、その機能を果たしています。では、言語が、物事や事象を表すということは、ということなのでしょう。言葉を話すようになる前の子供の遊びにヒントがあります。

子供が遊んでいる様子を見てみると、おもちゃのコップを見て飲む真似をしたり、小石をお菓子に見立てて食べるふりをしたりしていることがあります。このような何かをする真似やふりをすることを、「見立て」と言います。最初は似ているもの、例えば、丸くて赤いものをりんごに見立てることから始まります。次第に全く外見が似ていないものを本物に見立てるようになります。例えば、子供が積み木を車に見立てて、「ブーブー」と発しながら動かして遊んでいることがあります。このとき、子供の頭の中には、自分が見たり、乗ったりした自動車のイメージが浮かんでいます。

この子供が車に見立てて遊んでいる「積み木」は、シンボルとなっており、「言葉」の役割ととても似ています。

シンボルとしての言語②

言葉は「シンボル」であり、直接物事に対応するだけでなく、「イメージ」に対応している。



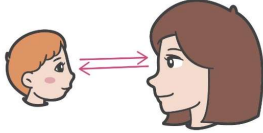
音声の「くるま」は、単なる音のつながりで、それ自体には本物の車とは特に何の関係ありません。音声以外の、文字、指文字、手話でも同様です。それにもかかわらず、「くるま」という言葉で理解できるのは、なぜでしょうか。それは、積み木を見立てている時と同様に、車のイメージが頭の中に浮かぶからです。

出かける際に「車に乗るよ。お買い物に行こうね。」、子供が散歩中に走っている自動車を見つけた際に「ぶーぶー、車だね。どこに行くのかな。」等、大人は状況や子供の興味に応じて、様々な言葉掛けをしています。このような生活での様々な経験から、「車」にまつわるイメージが形成されていきます。そのイメージが介在することで、対象とシンボル、つまり対象と「くるま」という言葉が関係づけられ、結びつくのです。つまり、言葉は「シンボル」であり、直接物事に対応するだけでなく、イメージに対応しているのです。

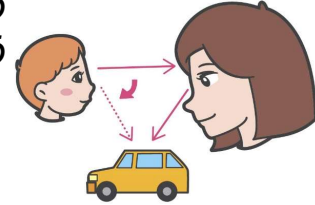
このように言語を使うためには、その背景となるイメージ等の概念の形成が大切であり、イメージを形成するための豊かな経験が必要です。

言葉の獲得の背景① 共同注意の成立

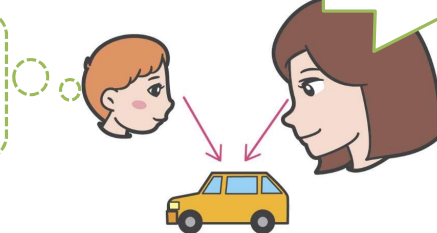
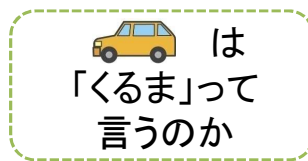
アイ・コンタクト



大人の視線を子供が追う
子供の視線を大人が追う



共同注意(joint attention)



あ、くるま だ

【参考】小林春美 (2005). 言語発達と共同注意. 岩立志津夫・小椋たみ子(編), よくわかる言語発達 (pp. 28-31). ミネルヴァ書房.



ここからは、もう少し具体的に、子供が「ものには名前がある」ということを、どのように理解していくのか、その背景を説明していきます。

私たちが会話をするとき、身の回りの様々な事物のどれかについて取り挙げます。相手と自分が別々の対象に注意を向けていたとすると、会話は成立しなくなります。言葉を交わす時、会話に参加している人たちが同じ対象に注意を向けることを、「共同注意」と呼びます。共同注意は、人間のコミュニケーションを成立させるための基本となり、言葉の獲得において重要な役割を担っています。

共同注意は、子供が大人の視線を追いかけて、あるいは大人が子供の視線を追いかけて、対象に対する注意を他者と共有することで成立します。

共同注意の成立によって、子供は、大人と注意の対象を共有し、その時、大人から発せられた言葉を対象と結びつけて理解できるようになります。例えば、スライドに示した例では、大人が見ているものに対し「くるま」と命名することによって、子供は「もの」と「くるま」という意味関係を徐々に理解していきます。

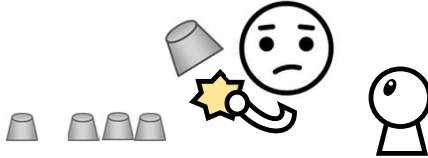
言葉の獲得の背景② 意図の理解

Tomasello & Barton (1994)の実験(対象18～24か月)

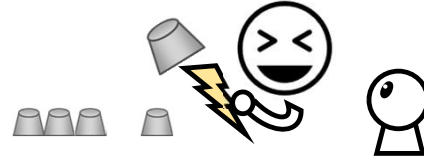
「トーマ(無意味語)を探しに行く」と告げて、

物品が一つずつ入った五つのバケツの前に移動する。

①バケツから取り出した物を見て
顔をしかめ、元の位置に戻す。



②バケツから取り出した物を見て
笑顔で喜ぶ。探すのを止める。



子供は①②どちらが「トーマ」だと判断したでしょうか？

Tomasello, M. & Barton, M. (1994) Learning words in non-ostensive contexts. *Developmental Psychology*. 30 (5), 639- 650 .

10



さらに、共同注意が成立している際に、子供は大人の視線だけではなく、行動や表情等もよく観察しています。そのことを示すトマセロの研究を紹介します。

1歳半～2歳の子供を対象に、子供が一度も聞いたことがない、この実験のために作られた無意味語『トーマ』という単語を、学習できるかを調べます。

まず、子供に「トーマを探しに行くよ」と告げ、物品が一つずつ入った五つのバケツの前に移動します。

パターン1では、バケツから取り出した物をみて、顔をしかめ、元の位置に戻し、他のバケツを調べます。パターン2では、バケツから取り出した物を見て、笑顔で喜び、探すのを止めます。

子供はパターン1と2、どちらが「トーマ」だと判断したと思いますか。

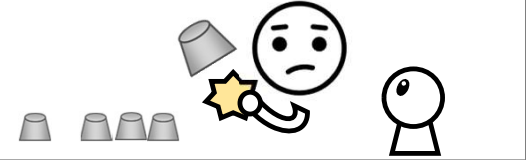
言葉の獲得の背景② 意図の理解

Tomasello & Barton (1994)の実験(対象18～24か月)

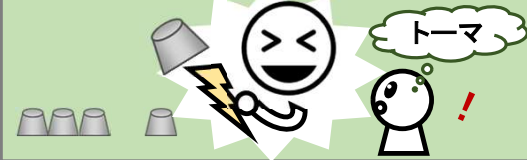
「トーマ(無意味語)を探しに行く」と告げて、

物品が一つずつ入った五つのバケツの前に移動する。

①バケツから取り出した物を見て
顔をしかめ、元の位置に戻す。



②バケツから取り出した物を見て
笑顔で喜ぶ。探すのを止める。



喜んだ物＝探していた物⇒「トーマ」だと学習した

子供は大人の意図を理解し、大人の行動や情緒の手掛かりから、物品と名称とを対応づけている。

Tomasello, M. & Barton, M. (1994) Learning words in non-ostensive contexts. *Developmental Psychology*. 30 (5), 639- 650 .

11



皆さん、想像できたでしょうか。子供たちは、パターン2のように大人が喜んだ物が、探していた物で、それが『トーマ』だと学習していました。

子供は、大人の意図を理解し、大人の行動や情緒の手掛かりを用いて、物品と名称を対応づけていると考えられます。

したがって、幼児期の言語指導にあたっては、絵カードを用いてその単語の名称を教える等のような、単にその言葉を聞く頻度を高める方法だけではなく、お店屋さんごっこをする等のように、豊かな経験と発話意図が尊重される機能性の高い場面設定があることが望ましいといえます。

聴覚障害児の言語発達の留意点①

聴取経験

聴児



子供自ら共同注意を成立させている。

あ！なくした時計が、
こんなところにあった。

聴覚障害児



自分の視野の外での会話を聞き取り、
そこに注意を向けることは難しい。

あ！なくした時計が、
こんなところにあった。

音声言語（日本語）の環境の中では、
生活の中で周囲の会話を聞くことで得られる、
様々な言葉の経験の幅が狭まる可能性

12



では、ここまでの内容を踏まえ、なぜ聴覚障害がある場合、言語発達において留意が必要となるのか、考えてみましょう。

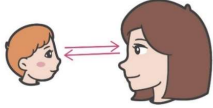
聴覚障害のない場合、1歳半以降になると、自ら探索して、積極的に他者と共同注意を成立させるようになってきます。例えば、「あ！なくした時計が、こんなところにあった」という母親の声が聞こえてくると、玩具で遊んでいた子供は、母親の方を向き、母親の視線の先にあるものが「時計」だと理解するようになります。

しかし、聴覚障害がある場合には、自分の視野の外での会話を聞き取り、そこに注意を向けることは難しくなります。母親の声を聞き取って後ろを振り向くことは難しく、この時に、母親の視線の先にあるものが「時計」だと、対象と言葉を結びつける機会が得られません。また、たとえ目の前で話し掛けたとしても、早口の音声等、その子にとって分かりにくい方法では、言葉そのものを聞き取ることができません。言葉や、言葉に結びつく、イメージを形成するための経験の機会が少なくなってしまうです。

このように聴覚障害児は、日本語等の音声言語の環境では、生活の中で自然と入ってくる周囲の会話を聞くことで得られる、様々な言葉の経験の幅が狭まる可能性があります。そのため、コミュニケーションの中での言葉掛けを積み重ねていくとともに、何気ない日常のことを話題にする等の学習の機会を増やしていくことがとても大切になります。

聴覚障害児の言語発達の留意点② 言葉掛け

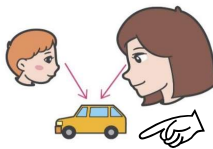
①アイ・コンタクト



聴覚障害児は、何かを見ながら「聞く」ことは難しいため、

話し掛けるタイミングに留意する。
多様なコミュニケーション手段で伝え合う。
(音声、視線、表情、身振り、手話、指文字、文字等)

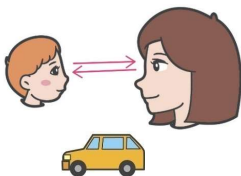
②共同注意



「あ！」(驚いた表情、クルマを指さす)

子供がクルマを見た後、視線が合うのを待つ

③言葉掛け



「ブーブー、くるまだね」(音声、手話、身振り等で)

子供の音声や手話等の表出を待ち、言葉掛け

例) 子供の言葉を復唱「そうだね。ブーブー。」

子供の言葉を拡張「ブーブーくるまがはしるよ」
(クルマを動かして見せる)

次に、共同注意の観点から、聴覚障害児に対して言葉掛けをする際の留意すべき点について説明します。

まず、聴覚障害児が言葉を聞く時には、併せて「見る」ことが必要になります。音声情報をより正確に聞き取るためには、話し手の表情や口の動きを見る必要があります。手話の場合にも、手の形に加え、表情、口の動きを見る必要があります。対象のものに視線を向けたまま、あるいは何か活動しながら、話を聞いたり、手話を見ることは難しいと言えます。そのため、子供の視線の動きに注意し、話し掛けるタイミングに留意する必要があります。

例えば、先ほど説明した共同注意の流れに沿って考えてみると、まず、子供と視線を合わせ、一緒に対象を見て、そして、また視線を合わせてから、「ブーブー、くるまだね」等と、言葉掛けをします。見る時と、話す時は順に行います。このとき、子供の視線の動き等から、子供が何に興味を向けているのかを観察することが重要です。

子供が音声や手話等で表出したら、子供の言葉をそのまま復唱したり、子供の言葉を拡張するように「ブーブー、車が走るよ。」等と言語を加えた言葉掛けをして、実際に車を動かして見せる等、イメージと言語を併せて広げていきます。さらに、音声だけでなく、視線、表情、身振り、手話、指文字、文字等の多様なコミュニケーション手段で伝え合い、その子にとって「分かる」やり取りを積み重ねる中で、相手に自分の気持ちを伝えたい、見つけたものを共有したいというコミュニケーション意欲を育てていくことが、とても大切となります。

Ⅱ．聴児の言語発達

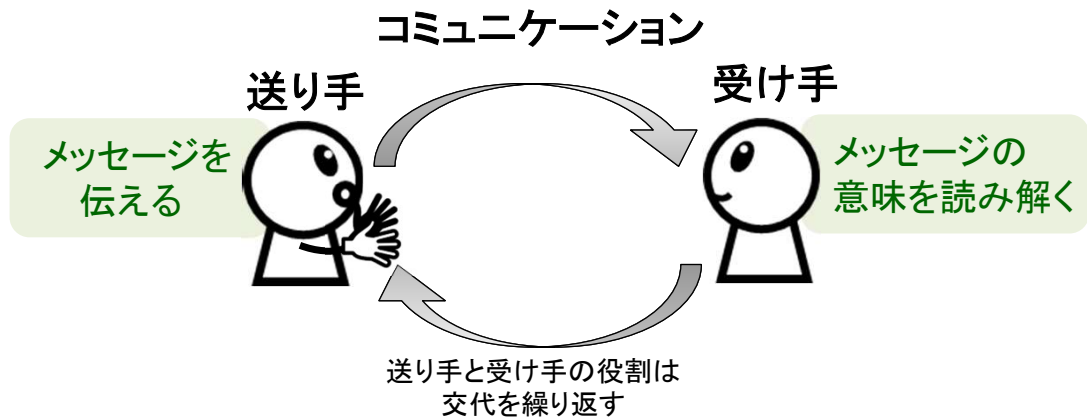
1．コミュニケーションから言葉へ

2．学習の手段としての言葉へ

ここからは、聴児の言語発達について説明していきます。

まず、乳幼児期にコミュニケーションの中で言葉の獲得がどのように進むのかを説明します。

コミュニケーションと言語



- メッセージは、言語、視線、表情、身振り、姿勢等様々な手段で表される。
- 自分の意図を伝えるために、「言語」は効率的な手段となる。

【参考】藤永保(監)(2013)最新心理学辞典. 平凡社. (p.217「対人コミュニケーション」)

15



これまで繰り返し「コミュニケーション」という言葉を使用していますが、そもそもコミュニケーションとはどのようなものでしょうか。

コミュニケーションは、送り手がメッセージを伝え、受け手がその意味を読み解くこと、これを繰り返すことで成り立ちます。送り手と受け手の役割を交代しながら、やり取りが進んでいきます。

メッセージを伝える方法は、言語だけではありません。視線、表情、身振り、姿勢等、様々な手段で表されます。笑顔で頷く、眉をひそめて手を振る等、言葉以外にもたくさんのメッセージが込められています。

メッセージの受け手は、自分の知識や経験に基づくフィルターを通してメッセージに含まれる情報を解釈していきます。そのため、受け手の解釈の仕方によっては、送り手の意図が適切に伝わらないことも少なくありません。

「眉をひそめて手を振る」のような解釈の幅が広い表情や身振りに比べて、言語は、「犬は苦手なの。なでるのは無理。」のように相手により正確に意図を伝えるための効率的な手段となります。

コミュニケーションの種類

①要求伝達: 自己の目的のために他者を動かす行為

例: 指示(早く起きなさい。忘れ物はないか調べたの?)

要求(あれ、とって。お皿を運んでくれない?)

②相互伝達: 他者と関わること自体が目的行為

例: あいさつ(おはよう。はじめまして。)

叙述(いい天気だね。お人形、かわいいでしょ。)

言葉が話せるようになる前から、コミュニケーションをしている。
子供は、どのようにして自分の要求や思いを言葉で伝えられる
ようになっていくのでしょうか？

【参考】長崎勤・小野里美帆(1996). コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社.
(p.2-30「第1章 コミュニケーションからことばへ」)

16



もう少し具体的にコミュニケーションについて考えていきましょう。日常生活の中で、子供とどのようなコミュニケーションをしているのでしょうか。

例えば、子供に対して、毎朝の支度の際には「忘れ物はないか調べたの?」と問い掛けたり、夕飯の支度の際には「お皿を運んできてちょうだい」と要求をしたりすることがあるでしょうか。すると、子供はランドセルの中を見たり、お皿をテーブルに運んだりするでしょう。日常生活において、必要で、明確な目的を持ったやり取りといえます。

一方で、子供が朝起きてきた際に「おはよう。今日はいい天気だね。」といった言葉掛けもしますね。これは、子供と気持ちを共有することや、会話すること自体が目的となります。

このように私たちのコミュニケーションは、大きく二つに分けて考えることができます。前者は、自己の目的のために他者を動かす実用的、実際の発話行為である「要求伝達」です。後者は、他者の気持ちに沿い、他者と関わること自体が目的の相互的な発話行為である「相互伝達」です。

子供は、最初から言葉でのコミュニケーションができるわけではありません。表情、視線、発声、身振り等様々な手段で、コミュニケーションをしています。では、どのようにして自分の要求や思い等を言葉で伝えるようになっていくのでしょうか。大人の言葉掛けに着目して説明していきます。

要求伝達の発達

4～5か月頃：対象に手を伸ばす

6～8か月頃：伝達相手を注視＋対象に手を伸ばす

9～12か月頃：対象に指さし＋相手を注視＋**発声**

1歳～1歳半頃：身振りを伴って**言語で要求**

1歳半～2歳頃：**二語文で要求**

子供の気持ちを代弁する言葉掛け

「牛乳、かな？」

「牛乳、ちょうだい？」

「牛乳、ほしい？」



→ **言葉による伝達の基礎が形成されていく**

【参考】長崎勤・小野里美帆(1996). コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社. (p.2-30「第1章 コミュニケーションからことばへ」)
イラスト: 上記書籍p.95より引用

17



まずは、要求伝達の発達です。

生後4～5か月頃になると、子供は「欲しいもの」の意識がはっきりし、スライドのイラストのように対象に手を伸ばすといった方法で要求を表現できるようになります。生後6～8か月頃になると、大人を見てから欲しいものに手を伸ばすという方法で、人に依頼することを始めます。生後9か月頃を過ぎると、コップを指さして、「にゅにゅ」と言いながら大人を見るといったように、あらゆる手段を組み合わせる要求する様子がみられます。この時、大人はどうするでしょうか。この子は「牛乳を欲しがっているな」と判断し、「牛乳、ちょうだい？」「牛乳、ほしいの？」等と子供の気持ちを代弁するような言葉掛けをして、子供にコップを渡すのではないのでしょうか。

子供は、このような大人の言葉掛けを模倣し始めます。1歳～1歳半頃には、身振り等を併用しながら言語で要求し始め、1歳半～2歳頃には、「牛乳、ちょうだい」のように二語文で、自分の知っている言葉をつなげて、要求するようになっていきます。

このように子供は、言葉を話すようになる前から、意図的な身振りや発声、注視等の非言語的な方法で要求伝達をしています。また、それに対して、大人が子供の気持ちを代弁するような言葉掛けをしながら、要求に対応しています。このようなやり取りが繰り返される中で、言葉による伝達の基礎が形成されていきます。

相互伝達の発達①

4～6か月頃：自発的働き掛け(子供「アー」→大人「なあに？」)

7～9か月半頃：持っているものを他者に提示する

9～12か月頃：持っていたものを大人に差し出す

1歳頃～：指さして物や出来事を他者に知らせる

子供の気持ちを代弁する言葉掛け

「あら！お人形さん」
「いいもの見つけたね」
「お人形さん、かわいいね」

他者に自分が関心を持ったものや出来事を示し、共に関心を持ってもらおうとする

人とやり取りすること自体を楽しむことの積み重ねが大切



【参考】長崎勤・小野里美帆(1996). コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社. (p.2-30「第1章 コミュニケーションからことばへ」)
イラスト: 上記書籍p.137より引用

18



次に、相互伝達の発達です。

生後4～6か月頃になると、子供は大人の方を見て「アー」と声を出し、大人が「なあに？」と反応すると、また「アー」と声を出す等、子供から自発的に働きかける様子がみられるようになります。

生後7～9か月頃には、スライドのイラストのように、持っているお人形を大人に提示する行為、生後9か月～12か月頃には、持っていたものを大人に手渡す行為がみられます。このように子供が持っている人形を持ち上げて「アー」と声を出したら、「あら、お人形さん。かわいいね。」等と言葉を掛けたいくなるのではないのでしょうか。先ほどの要求伝達のやり取りの時と同様に、大人は子供の気持ちを代弁するような言葉掛けをしています。子供は、大人が喜んでくれたり、反応してくれたりすると、ますます他者に自分が関心を持ったものや出来事を示し、共に関心を持ってもらおうとします。

1歳以降になると、自分が見つけたものを指さす等、自分の関心を持ったものや出来事を他者に知らせることが増えていきます。

このように人との関わり、やり取りすること自体を楽しむことの積み重ねが、相互伝達的なコミュニケーションの発達を促していきます。

相互伝達の発達②

1歳～1歳半頃:

自分の行為や心的状態の叙述(例:「おいしい」、「いたい、いたい」)

子供:おやつを食べながら大人を見る

大人:「おいしいね」(音声)+サイン(頬に手を当てる)
(子供の気持ちを代弁する言葉掛け)

子供:「ちい」+サイン(頬に手を当てる)
おやつを食べる

大人:「んー、おいしい。おいしい。」
(子供の気持ちを代弁する言葉掛け)

子供:「ちい」



【参考】長崎勤・小野里美帆(1996). コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社. (p.2-30「第1章 コミュニケーションからことばへ」)
イラスト: 上記書籍p.179より引用

19



1歳～1歳半頃になると、「おいしい」、「いたい」等、自分の行為や心的状態を言葉で叙述する様子が見られるようになります。

この背景にも、前述した例と同様に、子供の気持ちを代弁した言葉掛けがあります。例えば、子供がおやつを食べているのを見て、大人が「おいしいね」と言葉掛けをする様子がよく見られます。音声での言葉掛けと一緒に、頬に手を当てるサインを付けることもあります。子供は、大人の言葉やサインを模倣するようになっていきます。子供の非言語的意味内容を、大人が言語化し、それを子供が真似をすることが1歳以降徐々に増加していきます。

相互伝達の発達③

1歳半～2歳頃:

- 他者の行為を二語文で叙述
(例: 泣いている友達を見て「Aちゃん、アーアー」)
- 過去や未来の非現前事象への言及
過去の出来事の想起
(例: 父親の見送りをした後、ドアを指さして「パパ、バイバイって」)
近未来の理解
(例: 親「何、食べたい？」→子「パン、にゆうにゆう(牛乳)」)

➡ 目の前のものや出来事「今、ここ」を離れ、
過去や未来の出来事について言語で伝えようとし始める

【参考】長崎勤・小野里美帆(1996). コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社. (p.2-30「第1章 コミュニケーションからことばへ」)

20



さらに、1歳半～2歳頃になると、泣いている友達をみて「Aちゃん、アーアー」等と、自分だけでなく他者の行為を二語文で叙述するようになってきます。さらに、過去の出来事を想起し、父親に「バイバイ」と見送りをしてしばらくした後、ドアを指さして「パパ、バイバイって」等と発言することや、近未来の理解が始まり、「何、食べたい？」という問い掛けに「パン」と答えることができるようになります。

このように他者と関わることを目的としたやり取りの中で、子供は自分の見つけたものや、楽しかった出来事等を相手に伝えようという気持ちを高めていきます。目の前のものや出来事「今、ここ」を離れ、過去や未来の出来事について言語で伝え始めるようになっていきます。初めは、自分一人では言葉で上手く伝えることはできません。大人が気持ちを代弁したり、言葉を補足したりと、丁寧なやり取りの積み重ねが大切です。伝わったという体験が、また相手に伝えたいというコミュニケーション意欲にもつながっていきます。

Ⅱ．聴児の言語発達

1. コミュニケーションから言葉へ

2. 学習の手段としての言葉へ

続いて、コミュニケーションの中で獲得された言語が、学習の手段としての言語となっていく過程について説明します。

学習の手段としての言語

- **学習言語**を習得する(⇔幼児期:生活言語)
(学習の手段として、思考を深め、知識を得るための言語)

- 書き言葉の習得

日常の会話ではあまり使われることのない

多様な語彙(抽象語彙、慣用句、^{ごい}ひゆ 比喩表現等)や

複雑な構文に触れる経験が拡大する。

【参考】大伴 潔・原 恵子 (2021) . 第1章 言語とコミュニケーションの発達. 深浦順一・藤野 博・石坂郁代(編), 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版(pp.1-32). 医学書院.

幼児期は、コミュニケーションを通じて、遊びや生活等具体的な場面や活動の中で経験した事柄と言葉を結び付けながら、「生活言語」を身に付けていきます。そして、児童期には、教科学習や、学校行事等の多彩な活動の中で、言語を用いた経験が広がります。その中で、子供は言語を学習の手段として使用していくようになります。学習の手段として、思考を深めるため、知識を得るための言語を、「学習言語」と呼びます。学習言語の習得は、児童期の言語発達の重要な側面となります。

また、書き言葉の世界が本格的に展開し、音声言語と相互に関連しながら発達します。書き言葉の体系を学ぶことは、学童期の教育課程において重要であり、高度な言語力や思考の発展、教科学習を支える力となります。

また、読み書きによって、日常の会話ではあまり使われることのない多様な語彙や、複雑な構文に触れる経験が拡大します。例えば、小学校4年生の国語では「頭をひねる」等の慣用句等、本来の意味から飛躍した言葉が扱われています。

読みの発達①

ほうが 読みの萌芽期(～5歳頃)

- ・自分の名前等の特定の文字が読める
- ・読むふりの行動
- ・音韻意識の発達

読むことを学ぶ段階(5歳頃～小学校1・2年)

- ・文字と音の対応を習得
- ・特殊音節等を含む表記の読み方
(例)「ちょう」: 拗音(ょ)・長音(う) 「きって」: 促音(っ)

学ぶために読む段階(小学校3・4年～)

- ・流暢に読めるようになる
- ・簡単な読み物を読んで理解する
- ・読むことで新しい知識や概念を得る

【参考】田中裕美子(2005). 読み・書きの発達. 岩立志津夫・小椋たみ子(編), よくわかる言語発達(pp.58-61). ミネルヴァ書房.

児童期の書き言葉の習得は、幼児期からの準備段階を基盤としています。

まず、幼児期に「読みの萌芽期」があります。幼少期に子供が、生活の中で文字に触れることで、文字の形や機能に気付くようになる段階です。いつも目にする自分や友達の名札に書かれている名前の文字、看板の文字等、同じ場所や場面に限られますが、いくつかの特定の文字が読めるようになります。

また、家族が本を読んだり、何かを書いたりするのを目にして、日常生活の中における文字の機能を理解するようになります。子供自身が、絵本を開いて読むふりをする遊びが見られるようになります。この時期に、絵本と一緒に読んであげることとはとても大切です。文字についての意識を高めるだけでなく、書かれている内容について質問したり、答えたりという会話の機会は、話し言葉の発達も促すことになります。

さらに、この時期に読みの発達に必要な音韻意識が著しく発達します。

音韻意識の発達

音韻意識

- ・音の連鎖からなる話し言葉の音韻的な側面に注目し、話し言葉の音韻構造を把握し、その中の音韻的な単位に気付き、操作する能力
- ・4歳半～5歳頃にかけて発達し始める
- ・音韻意識と読みの発達は相互に高め合う関係にある

【音韻意識の発達をみる課題の例】

- ・音韻分解
- ・音韻抽出
- ・音の削除
- ・逆唱

音に併せて拍手
最初の音は？
「ル」を取ると？
逆さまにすると？

使用単語：クルマ

「ク」「ル」「マ」

「ク」

「クマ」

「マルク」

【参考】原 恵子.(2012). 幼児期・学齢期の音韻意識の発達. 日本音響学会誌, 68(5), 260-265.

24



では、音韻意識とはどのようなものでしょうか。音韻意識は、音の連鎖からなる話し言葉の意味的な側面ではなく、音韻的な側面に注目し、話し言葉の音韻構造を把握し、その中の音韻的な単位に気付き、操作する能力のことを言います。音韻意識の発達をみるために用いられる課題に、音韻分解課題、音韻抽出課題、音の削除課題、逆唱課題等があります。

音韻意識は、4歳半から5歳頃にかけて発達し始め、単語を不可分な音の連続体として捉えている段階から、音韻分解が可能になる段階へと進みます。

幼児期に文字を1字ずつ読む、1字読みが可能になるためには、音韻分解し、語頭音を抽出する行為の形成が、重要であると考えられています。リズム歌、しりとり、逆さま言葉等、子供の遊びの中でも音韻意識は培われていきます。

音韻意識の発達により読める文字の数が増え、また読みの習熟に伴って音韻意識の発達も促されるといった、音韻意識と読みの発達は互いに高め合う関係にあるとされています。

読みの発達②

読みの萌芽期(～5歳頃)

- ・自分の名前等の特定の文字が読める
- ・読むふりの行動
- ・音韻意識の発達

読むことを学ぶ段階(5歳頃～小学校1・2年)

- ・文字と音の対応を習得
- ・特殊音節等を含む表記の読み方
(例)「ちょう」: 拗音(ょ)・長音(う) 「きって」: 促音(っ)

学ぶために読む段階(小学校3・4年～)

- ・流暢に読めるようになる
- ・簡単な読み物を読んで理解する
- ・読むことで新しい知識や概念を得る

【参考】田中裕美子(2005). 読み・書きの発達. 岩立志津夫・小椋たみ子(編), よくわかる言語発達(pp.58-61). ミネルヴァ書房.

読みの萌芽期を経て、「読むことを学ぶ」段階に入ります。平仮名の読みを中心に、文字と音の対応を習得する時期で、5歳頃から小学校1・2年生に相当します。平仮名の一つ一つの文字を読む1字読みや、拗音、促音、長音等の特殊音節が含まれる表記の読み方を学んでいきます。徐々に、個々の文字を結合して、平仮名の単語が読めるようになります。

そして、「学ぶために読む」段階に入ります。小学校3・4年生頃になると、文字を読むことが迅速にでき、知っている漢字も増え、文章を流暢に読めるようになります。読むことで新しい知識や概念が得られるようになってきます。

Ⅲ. 聴覚障害児の 言語発達の特徴

26



次に、聴覚障害児の言語発達の特徴について説明します。

聴覚障害児の言語発達の特徴①

音声言語の発達は、聴児とほぼ同様の発達の順序をたどるが、**個人差が大きい**

- 適応型言語能力テスト（ATLAN）の結果（Takahashi, et al, 2017）
聴児と比べて
「漢字の書き取り」は差異がみられない
「語彙」の偏り、「文法」の遅れがみられる場合がある
- 読書力検査の結果（長南・澤, 2007）
聴児に比べて読書力評価の成績が低い
小学校高学年以降に成績の向上がみられない場合がある

- 長南浩人・澤 隆史 (2007) 読書力診断検査に見られる聾学校生徒の読書力の発達. ろう教育科学. 49 (1), 1-10.
- Takahashi Noboru, Yukio Isaka, Toshikazu Yamamoto, Tomoyasu Nakamura (2017) Vocabulary and Grammar Differences Between Deaf and Hearing Students. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*. 22(1), 88-104.

27



聴覚障害児の幼児期から児童期の音声言語の発達は、聴児と比べると全般的に遅れが認められるものの、乳幼児期から早期教育を受けた場合には、聴児とほぼ同様の発達の順序をたどることが報告されています。一方で、音声言語の発達は、個人差が非常に大きくあります。

適応型言語能力テストの結果から、聴覚障害児は聴児と比べて「漢字の書き取り」では差異がみられなかったものの、「語彙」の偏りや「文法」の遅れがみられること、読書力検査の結果から、聴覚障害児は聴児と比べて読書力の評価の成績が低いことや、小学校高学年以降において学年に伴う成績の向上がみられないこと等が報告されています。

このような音声言語の発達の個人差に関連すると思われる要因は、聴力の程度、失聴した時期、家庭でのコミュニケーション環境、早期からコミュニケーションや言語に関する支援や教育があったかどうか等、様々なものが考えられます。

聴覚障害児の言語発達の特徴②

「生活言語」から「学習言語」への移行の難しさ

- ・ 生活言語のレベルアップが重要

→ 講義7「聴覚障害教育における自立活動①(言語指導)」にて説明

- ・ 読むことを通して日本語に触れることが重要

→ 講義8「聴覚障害教育における指導の実際Ⅰ(国語科)」にて説明

【参考】齋藤佐和(2018)日本の聴覚障害教育の変化：言語指導法を中心に. 聴覚言語. 47 (1), 1-20.

28



また、聴覚障害児は、小学校からの教科指導の基礎となる、生活言語から学習言語への移行が難しい場合があります。

学習言語の土台となる生活言語のレベルアップをしていくこと、文字を読むことによって、日本語に触れることが非常に重要になります。生活の中で聞くことによる経験の蓄積が狭まりやすい聴覚障害児にとって、本や教科書等の書物を読むことで、間接的な経験を増やすことができます。

なお、生活言語から学習言語への発達についての詳細および、その発達段階に応じた指導については、この後の講義「聴覚障害教育における自立活動①(言語指導)」、聴覚障害児の読みの困難さと、指導の工夫については、この後の講義「聴覚障害教育における指導の実際Ⅰ(国語科)」にて扱います。

聴覚障害児の語彙の発達

- **具体的な言葉**は獲得しやすい
視覚的に対象や行為が分かる
日常的によく使用する
- **抽象的な言葉**は獲得が困難
視覚的に対象や行為を示しにくい
生活に関連が薄い
- 理解している意味の広がり狭い

【参考】左藤敦子・四日市章(2000).聴覚障害児の語彙に関する文献的考察. 心身障害学研究,24,195-203.

29



ここでは、先ほどの説明にあった聴覚障害児の獲得する語彙に偏りがあることについて、取り挙げて説明します。

聴覚障害児の語彙数は、発達に伴って緩やかに増加するものの、小学校高学年頃から個人差が大きくなります。この背景には、聴覚障害児にとって、獲得が容易な語と、獲得が困難な語があることが関係しています。この違いは为什么呢。

「犬」「コップ」等の名詞や、「走る」「混ぜる」等の動詞といった、具体的な意味を表す単語は獲得しやすいとされています。このような単語は、視覚的に対象や行為が分かりやすく、実際に見たり、触ったりできるものであり、日常的に使用する頻度も高いものです。

一方、視覚的に対象や行為を示しにくい抽象的な言葉、特に自身の生活に関連が薄い語彙等は獲得が難しい場合が多いです。聴児の場合は、日常でテレビから流れるニュース等を耳にして、なんとなくイメージがある場合もありますが、聴覚障害児は、教科書で目にして初めてその単語に触れることも多くあります。例えば、「災難」という言葉を子供にイメージさせるためにどのような教材を用意すればよいでしょうか。写真を見るだけではイメージすることが難しく、写真を見て話し合ったり、物語を読んだりする等の工夫が必要になるでしょう。

また、単語一つ一つは知っていても、理解している意味の広がり狭いという特徴があります。例えば、「空が晴れる」という表現は理解できても、「気が晴れる」という表現は理解しにくいとされています。「気が晴れる」とは、心が晴れた空のようにすがすがしい状態になることを表しており、このような比喩の理解に困難を示すことがあります。

聴覚障害児の読みの発達

平仮名／指文字の1字読み

- ・ 聴児と同様に5歳前後で可能
- ・ 平仮名より先に指文字を読み始める場合がある

➡指文字(文字)と音の結びつきを学習

平仮名／指文字の単語・文章の読み

- ・ 1字ずつ読むことが可能でも、単語や文章として意味を読み取ることができない場合がある
 - － 単語そのものを知っているか
 - － 音韻意識の発達を促す指導

指文字による
単語表現



【参考】井口亜希子・田原敬・原島恒夫(2021)聴覚障害幼児における指文字の読み習得と音韻意識の発達:指文字と平仮名との比較. 発達心理学研究. 32(3), 148-159.

30



聴覚障害児にとって、本や教科書等の書物を読むことで、情報を入手することは、特に重要になります。では、聴覚障害児は、どのように文字を読むようになるのでしょうか。

聴覚障害児の文字の読みの発達には、指文字の読みも関係しています。

日常的に平仮名や指文字に触れる機会があれば、聴覚障害児が平仮名や指文字の1字読みが可能になる年齢は、聴児とそれほど違いはなく、5歳前後に可能になります。ただし、3歳後半頃に、平仮名よりも指文字から先に読み始める場合があります。この時、いつも目にする自分や友達の名前の指文字等、慣れ親しんでいるものが中心になります。次第に、「指文字の手形」あるいは「文字」と「音」の結びつきを学習していきます。

ただし、聴覚障害児は、1字ずつ読むことが可能でも、単語や文章としての意味を読み取ることができない場合があります。単語そのものを知っているか、手話等を用いて理解を確認することも必要です。また、文字の読みと音韻意識の発達は相互に高め合う関係にあるとされており、しりとりやリズム遊び等、子供の実態に応じて音韻意識の発達を促す指導も取り入れる必要があります。

IV. まとめ

31



最後に本講義のまとめです。

本講義のまとめ

I. 言語発達の基礎

- ・ シンボルとしての言語 → イメージの形成
- ・ 聴覚障害児の言語発達の留意点: 聴取経験、言葉掛けの仕方

II. 聴児の言語発達

1. コミュニケーションから言葉へ
子供の気持ちを代弁する言葉掛けが重要
2. 学習の手段としての言葉へ
学習言語、書き言葉の習得

III. 聴覚障害児の言語発達の特徴

- ・ 個人差が大きい
- ・ 獲得しやすい語と獲得しにくい語がある

32



まず、言語発達に関わる基礎的事項について説明しました。言語を使うためには、その背景となるイメージの形成が大切であり、イメージを形成するための豊かな経験が必要です。そのため、単に音声を聞いたり、手話を見たりするだけでなく、子供の様子に応じた大人の言葉掛けがある等、実際のコミュニケーションの中で言葉に触れることが重要です。聴覚障害児は周囲で話される音声に自発的に注意を向けることは難しいことから、日常生活の様々な場面で言葉掛けを積み重ねていくとともに、何気ない日常のことを会話の題材にすることがより多く必要となります。言葉掛けの際はタイミングに留意し、多様なコミュニケーション手段で、子供が分かる、伝わる経験が積み重ねられるようにすることが大切になります。

次に、聴児の言語発達について説明しました。乳幼児期に子供は言葉が話せるようになる前から、様々な方法でコミュニケーションをしており、他者とのやり取りを楽しむことや、言葉による伝達の基礎が形成されていきます。この時に、大人が子供の気持ちを代弁するような言葉掛けがあることで、子供は言葉の使い方を学び、自分の要求や思い等を言葉で伝えられるようになってきます。このような乳幼児期の「生活言語」を基盤として、児童期には学習の手段として、思考を深めるため、知識を得るための「学習言語」を習得していきます。また、読むことで新しい知識や概念が得られるようになってきます。

最後に聴児の言語発達の過程を踏まえた上で、聴覚障害児の言語発達の特徴について説明しました。聴覚障害児の音声言語の発達は、聴児とほぼ同様の発達の順序をたどるものの、個人差が大きいことが報告されています。抽象的な語彙は獲得されにくい等、聴覚障害児の言語発達の特徴を考慮し、発達段階に応じた丁寧な言語指導を行うことが重要となります。これ以降の講義で具体的な指導上の配慮について考えていきましょう。

引用・参考文献

- ・ 長南浩人・澤 隆史(2007)読書力診断検査に見られる聾学校生徒の読書力の発達. ろう教育科学. 49 (1), 1-10.
- ・ 藤永 保(監)(2013)最新心理学辞典. 平凡社.
- ・ 原 恵子(2012)幼児期・学齢期の音韻意識の発達. 日本音響学会誌,68 (5),260-265.
- ・ 井口亜希子・田原敬・原島恒夫(2021)聴覚障害幼児における指文字の読み習得と音韻意識の発達: 指文字と平仮名との比較. 発達心理学研究. 32(3), 148-159.
- ・ 小林春美(2005)Ⅱ-3 言語発達と共同注意. 岩立志津夫・小椋たみ子(編),よくわかる言語発達 (pp. 28-31). ミネルヴァ書房.
- ・ 長崎勤・小野里美帆(1996)コミュニケーションの発達と指導プログラム. 日本文化科学社.
- ・ 岡本夏木(1982)子どもとことば. 岩波新書.
- ・ 大伴 潔・原 恵子(2021)第1章 言語とコミュニケーションの発達. 深浦順一・藤野 博・石坂郁代(編), 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版 (pp. 1-32). 医学書院.
- ・ 齋藤佐和(2018)日本の聴覚障害教育の変化: 言語指導法を中心に. 聴覚言語. 47 (1), 1-20.
- ・ 左藤敦子・四日市章(2000)聴覚障害児の語彙に関する文献的考察. 心身障害学研究,24,195-203.
- ・ Takahashi Noboru, Yukio Isaka ,Toshikazu Yamamoto, Tomoyasu Nakamura (2017)Vocabulary and Grammar Differences Between Deaf and Hearing Students. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*. 22(1), 88-104.
- ・ 田中裕美子(2005)読み・書きの発達. 岩立志津夫・小椋たみ子(編),よくわかる言語発達 (pp. 58-61). ミネルヴァ書房.
- ・ Tomasello, M. & Barton, M. (1994) Learning words in non-ostensive contexts. *Developmental Psychology*. 30 (5), 639- 650.

本講義の引用・参考文献です。ご参照ください。

免許法認定通信教育講座－聴覚障害教育領域－


聴覚障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目

聴覚障害児の言語発達

終わり

講義作成：国立特別支援教育総合研究所 聴覚障害教育研究班
編集：国立特別支援教育総合研究所
講義収録日：2023年2月6日

34

 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

以上で、「聴覚障害児の言語発達」の講義を終わります。